
恋友第 2 章

小田 光香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋友第2章

【Nコード】

N0553F

【作者名】

小田 光香

【あらすじ】

恋友の続編です。感想などお願いします

思い上がり

それからの僕は完全に舞い上がっていた。綾子とのメールの一通一通が嬉しかった。ファミレスに行けば綾子と目があうたびに微笑みかけた。もちろん綾子も微笑み返してくれた。後から知ったのだがこのときすでに綾子は僕に好意を抱いていたらしかった。つまりすでに片想いは両想いになっていたんだ。

メールを始めてから2週間がたった日、僕は彼女をデートに誘った。デートと言えるかは分からないが僕が彼女を見つけたファミレスで二人で会った。

僕が来てから1時間後くらいに彼女は来た。今日は店員としてではなく、1人の女の子として僕に会いに来てくれたという事実には今までにない幸せを覚えた。でも…彼女は僕と同じ幸せを感じてくれてはいなかった。彼女はこのころ真剣な悩みを抱えていた。

彼女には恋人がいた。別れたいけどどうやって別れたらいいか分からないがと僕に相談してきたのだ。僕はしばらく状況が掴めなかった。僕は綾子が好きで…綾子には彼氏がいる…そのことを正しく理解するには少し時間がかかった。つまり…僕は彼女と彼女の彼氏との別れを手伝うという訳だ！

僕は彼女にとにかく別れ話をして、しつこいようだったら俺から言うよ。と告げた。するとなにを思ったのか彼女はおもむろに携帯をカバンのポケットから取り出して電話をかけた。

「今、カレシ呼んだから」……………はい？今ですか？もちろんながら僕は焦った。まさか自分がいるところでそんな話をしたら向こうの男はもちろん俺を新しい男かと疑うだろう。そうしたら完全に修羅場だ。

「やつぱりあたし1人じゃ恐くて言えないから…」綾子のその一言で僕は我に帰った。彼女が僕を必要としてくれている。僕は初めて彼女を守りたいと思った。

30分くらいして男が現れた。向こうはもうなんの話か勘づいていたようだった。綾子は男にもうあんたと付き合うつもりはないと言った。

「こいつがおまえの新しい男か？」と怒りの中にも明らかな蔑んでいる意志のこもった声で言われた。確かに男を見たときに僕なんか勝てっこないくらいイケメンだったし、喧嘩しても勝てる自信をなくしそうなくらいガタイも良かった。でもここでたじろいだら僕がここにいる意味はないと思ったから、僕は口を開いた。

「彼女はあなたを怖がってるんです。別れ話をしたらなにをされるか分からないから僕にここに来てくれて頼んだんです。自分が一緒にいて怖い人と付き合うなんておかしいと思いませんか？」

男はなにかを言おうとしたけどおもいきりテーブルを蹴飛ばすと舌打ちをして帰っていった。

「ありがとう」今までしつかりした子だと感じていたからこのとき初めて彼女の女の子らしいか弱い一面を見た気がした。でも、彼女のこんなにも女の子らしい一面を見たのはこれが最後だったとおもう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0553f/>

恋友第2章

2010年10月9日01時12分発行